公益社団法人
全国学校栄養士協議会報

平成30年1月
第71号

発　行
公益社団法人
全国学校栄養士協議会
電話 03（6380）4360

全学栄ホームページ http://www.zengakuei.or.jp/

明けましておめでとうございます。

皆様には、お健やかに新たな年明けのスタートに立たれたこととお喜び申し上げます。

昨年３月文部科学省より公示された新学習指導要領では、教育段階に応じた体力の向上や健康の確保に合わせ、食育の重要性が明確に記述されており、関連教科においても、学校における食育はさらに充実した内容となっています。続いて、栄養教諭の活動の指針ともなる「栄養教諭を中核としたこれからの学校の食育～チーム学校で取り組む食育推進のPDCA ～、が文部科学省より配布され、学校で取り組む食育推進の重要な手引きとなりました。

このような状況を受けて、栄養教諭が中核となって、食育の組織体制を構築し、学校が一体となって食育に取り組むように、積極的に働きかけることが重要です。そのためには、学校・家庭・地域をつなぐ人間力も求められます。また、栄養教諭が働きかけることで、何が変わったのかとの問いにも、取り組みを科学的に分析し、見える形で示す力が求められます。

本会では、会員のスキルアップを目指す講習会・研修会を開講します。また、「新しい食育」も小学校編・中学校編がそろいました。ぜひ、全国の会員の皆様において活用していただき、実績を作る１年にして頂きたいと願っています。

公益社団法人　全国学校栄養士協議会会長
長島　美保子

〈目次〉

●学校給食が変える子どもたちの未来・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2～3
●各部報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4～5
●研究推進助成事業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5～6
●第58回全国栄養教諭・学校栄養職員研究大会の報告・・・・・・・・・・・・・7
●第68回全国学校給食研究協議大会の報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
●都道府県だより・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

第2回都道府県代表者研修会

研究推進助成事業について発表した皆さん

学校給食が変える子どもたちの未来
～世界の食料問題を食育で伝える～

認定NPO法人　国連WFP協会　事業部広報　**西平 久美子**

世界の飢餓状況と国連 WFP の取り組み

国連が 2017年 9月に発表した最新の報告書によると、10年以上着実に減少を続けていた飢餓人口が前年より 3,800万人多い 8億 1,500万人に達し、再び増加に転じました。これは、日本の人口のおよそ 6倍にあたります。

国連世界食糧計画（国連 WFP）は、国連唯一の食糧支援機関であり、世界中から飢餓をなくすことをミッションとしています。主な支援活動としては、自然災害や紛争などが発生した際の緊急食糧支援や、母子栄養支援、自立支援などがありますが、その中の一つに学校給食支援があります。

学校給食がもたらす変化：子ども、家庭、そして国

学校給食支援とは、途上国の学校で栄養価の高い給食を提供するというもので、子どもたちの健全な発育を助けるとともに、就学率の向上に寄与しています。

貧しい家庭では、生計を支えるために子どもが働かなければならないことも多く、世界には小学校に通えない子どもが 6,100万人います（出典：UNESCO）。学校で教育を受けられないことで、何世代にも渡って飢餓や貧困から抜け出すことが困難になります。

栄養たっぷりの学校給食は、家庭で十分な栄養が摂れない子どもたちにとって、重要な栄養源となり、健全な発育を助けます。また、給食が呼び水となって、親は子どもを働かせるよりも学校に通わせることを選ぶようになります。空腹が満たされた子どもたちは、学習に集中できるようになり、出席率も向上。さらに教育を受けた子どもたちは将来への夢や希望を持つようになり、教育の普及は社会や国の発展につながります。日本も第二次世界大戦後に、国連による学校給食支援を受けました。学校給食が子どもたちを飢えから救い、健全な発育を後押しし、戦後復興の一助となったのです。

マラウイ：青空教室でも真剣に授業を受ける子どもたち

学校給食支援がつなげる希望

国連 WFP は世界 60カ国で 1,640万人の子どもたちに対して学校給食支援を行っています（2016年実績）。その中のひとつである南部アフリカのマラウイ共和国を、この 9月に視察で訪れました。最貧国の一つであるマラウイですが、内陸の乾燥した大地と、明るく親しみやすい人々が印象的な国でした。

国連 WFP の学校給食支援を受けている子どもたちとも交流する機会があり、小学校 7年生（マラウイの小学校は 8年制）のシャキラさんに話を聞きました。経済発展の進んでいる隣国の南アフリカ共和国へお

母さんが出稼ぎに出ているため、祖父母とお父さんと4人の兄弟の 8 人で暮らしている女の子です。

最初は物静かな印象でしたが、「ジャーナリストになりたいです。世界中を飛び回れるから」と夢を語った彼女の瞳は輝いていました。学校で学ぶことや、出稼ぎに出ているお母さんの存在が彼女の世界を広げ、さらに夢の実現へと近づけているのだと感じました。

マラウイの小学校は午前中で終わるため、始業前に給食が出る

国連 WFP 協会と全国学校栄養士協議会の協働

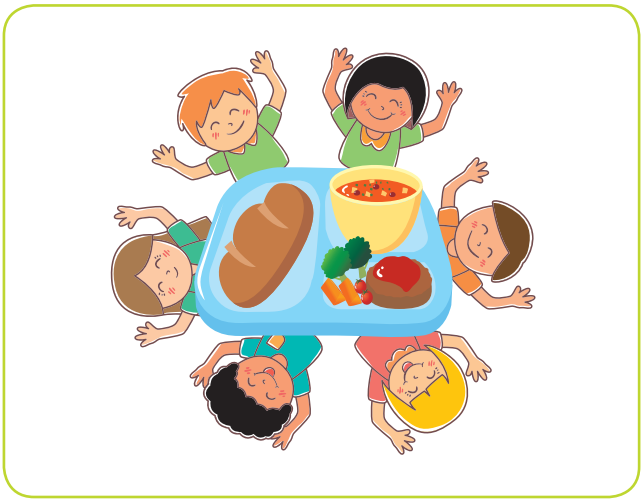
国連 WFP は世界約 80 カ国で支援活動を行なっていますが、その全ての活動資金は各国政府からの任意の拠出金や、民間企業・団体、個人の皆様からの寄付金で成り立っています。日本国内で寄付を募ったり、広報を行うことで、支援の輪を広げているのが、認定 NPO 法人国連 WFP 協会です。

この 11 月には全国学校栄養士協議会の栄養教諭 3 名の方にもご協力いただき、横浜のレンタルスペースにて、一般の方を対象にイベントを開催しました。国連 WFP の支援国の一つである東南アジアのラオスの学校給食を通じて飢餓や食料問題の現状や、国連 WFP の学校給食支援について学ぶと同時に、栄養教諭の皆さんから日本の学校給食が地産地消や国際理解などにも取り組んでいることや、栄養素をバランスよく取るためのヒントなどを解説いただき、世界と日本の学校給食や食について考える機会になりました。

イベントにてレクチャーを行う栄養教諭の皆様

世界と日本の食料問題

世界全体で 1 年に生産される食料の 3 分の 1 にあたる 13 億トンが廃棄されています。国連 WFP が 1 年間に配布する支援食糧が 350 万トンであるのに対し、日本で本来食べられるにも関わらず廃棄される食品ロスが 621 万トン（出典：農林水産省　平成 26 年度推計）と倍近くに上ります。自給率が低く、食料のほとんどを輸入に頼る日本が食への向き合い方を変えることは、食料問題解決への一歩となります。学校における食育を通じて、世界の食料問題にも目を向けていただければと思います。

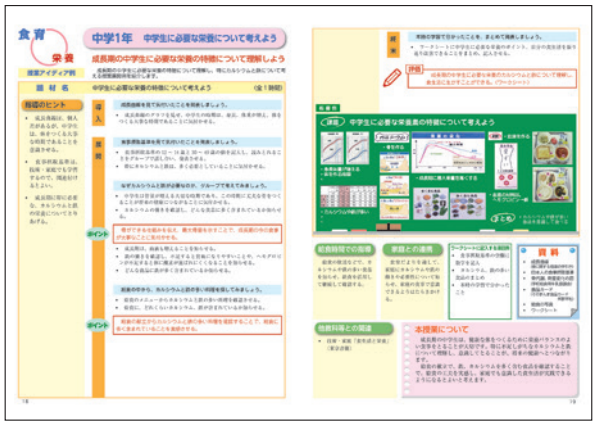


総務・運営部

新しい食育（3月発行）

本会では、平成25年度にカリキュラムプランを作成し、毎年食の教科書としての「新しい食育」の冊子を作成してきました。カリキュラムプランは、「栄養」「健康な生活」「食文化・感謝」の3つで構成し、教科書の指導内容ともリンクさせた、発達段階に応じた指導内容となっています。

今年度作成した「新しい食育（中学校Ⅱ編）」は、小学校Ⅱ編に引き続き食に関する指導技術（スキルアップ）の向上を図るための方法について示してあります。特に、新指導要領において謳われている「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業展開について、日本体育大学教授の角屋重樹先生に具体的な方策を示して頂いたり、「主体的・対話的で深い学び」のための新しい授業の手法の実践例も掲載したりしてあります。授業アイディア例もいくつも掲載されていますので、本書を計画的に活用していただき、食に関する指導や授業実践にお役立てください。



「新しい食育　中学校Ⅱ」　アイデア授業例

研 修 部

研究授業方式による衛生管理研究会の実施記録（1月発行）

今年度も、平成28年度に会員のみなさまに取り組んでいただきました研究授業方式による衛生管理研究会の報告書が、まとまりました。

本協議会では、平成8年に発生した腸管出血性大腸菌 O157による痛ましい事故以来、全国各地で熱心に取り組まれているこの研究会をきっかけに、施設設備面の改善、作業動線の見直し等を、現場の職員はもとより、施設長も加わって研究し、提出していただいた報告書を毎年冊子としてまとめております。今年度は有識者による指導助言において、女子栄養大学名誉教授（元文部科学省学校給食調査官）金田雅代先生から「衛生管理における栄養教諭の役割」と題してご提言をいただきました。若い栄養教諭の方々にもわかりやすく、現行の学校給食衛生管理基準の根拠やポイントを紹介していただいております。本冊子を今後の参考にしていただけることを願っています。

研 究 部

1　食育活動集（平成29年12月発行）

全国で行われている食育活動を会員間で共有するための冊子を作成しました。今回の冊子は、食育の成果と課題を意識した取組を実践するために、評価項目別にまとめました。全国で行われている素晴らしい取組を共有して、栄養教諭等全体のレベルアップを図りましょう。

2　ヒヤリハット事例から学ぶ食物アレルギー対応（3月発行）

昨年度、会員から収集した食物アレルギーヒヤリハット事例を基に「ヒヤリハット事例から学ぶ食物アレルギー対応」冊子を作成しました。平成26年度に本協議会が全国の栄養教諭等に対して行った食物アレルギー調査結果から、「アレルギー対応をしていて不安を感じることはありますか。」の問いに対して「ある」と答えた栄養教諭等は95.1%で、不安を感じながら食物アレルギー対応を行っている様子が伺えます。ヒヤリハット事例から

見えてきた課題の危害を分析し、重要管理点を対応のポイントとして記載しています。栄養教諭等が自信をもって食物アレルギー対応を行い、児童生徒が安心して楽しく食事が出来るように、本書を活用してください。

渉外部

災害時給食用非常食「救給シリーズ」

「救給カレー」「救給根菜汁」「救給コーンポタージュ」がそろいました。

ライフラインが途絶えた中で救援物資が届くまでの「いのちをつなぐ」非常食として全国の栄養教諭・学校栄養職員が開発しました。「防災の日の給食」「非常食体験」「学校を避難所とした生活体験」「自治体の防災訓練」などに活用してください。防災食を食べる経験で「もしか」の時に備えておきましょう。

救給シリーズ

特　徴

★アレルギー特定原材料等２７品目すべて不使用です。
★温めなくても水がなくてもそのまま食べられます。
★成長期の子どもたちが安心して食べられるように、国産の食材のみ使用しています。
★スタンディングパウチの容器で、そのまま食器として使用でき、かさばらずに捨てることができます。

購入方法

各都道府県の学校給食会へ※完全受注生産のため前月10日までに1ケース単位で注文してください。

本会では、平成 25 年度から会員個人又は団体が行う「食育に関わる研究」に対して毎年助成を行っています。 平成 30 年度は、6 月に募集します。
平成 28 年度に助成した福岡県、岡山県、石川県の研究を紹介します。

エビデンスに基づいた栄養管理と効果的な食に関する指導の究明

福岡県筑紫地区学校給食研究会　栄養教諭、学校栄養職員部会
代表　柗尾 真由美　深田 恭代　小林 亜矢

筑紫地区は、福岡市に隣接し、年々人口が増加している4市1町(筑紫野市、大野城市、太宰府市、那珂川町)で構成されています。本調査研究は、筑紫地区の栄養教諭、学校栄養職員(42名)において、子どもたちの生涯の健康のために、エビデンスに基づいた栄養管理と効果的な食に関する指導を探ることを目的としています。この調査研究で大切にしたいのは、子どもたちの食行動の変容です。調査結果だけで終わらせず、調査後のデータ解析が始まりと考えました。現在、分析結果を活用した3つの取組(図2)を筑紫地区内で統一して進めています。その取組の一つ、啓発資料について保護者の意見を集約した結果(図3)、98%の保護者がこれからの食生活に生かしたいと答えていました。

今後は次回調査対象となる現2年生を中心に、今回の分析結果を踏まえ、「野菜摂取量×共食、食事作り、給食の残菜」、「菓子類摂取量×朝食内容、給食の残菜」等の関係性から、効果的なアプローチの方法を考究し、子どもたちの食行動の変容へ向けて研究を進めていきたいと考えています。

【調査分析の結果を活用した取組(図1)】

1.啓発資料(リーフレット図1)の作成と活用
　・全児童及び各研修会等にて説明と配付
　・イベント、市役所内等にポスターにして掲示
2.筑紫地区「学校給食摂取基準及び標準食品構成表」の作成
3.保護者や子ども達に対する食に関する指導への活用
　・プレゼンテーション(保護者対象の講話用)の作成
　・食育だより等のコーナー設置と掲載(毎月)
　・教科、領域で使用する指導教材の作成

【啓発資料(リーフレット)(図2)】

【今後生かしたい内容(図3)】

児童生徒の食生活、日常生活習慣等の調査研究

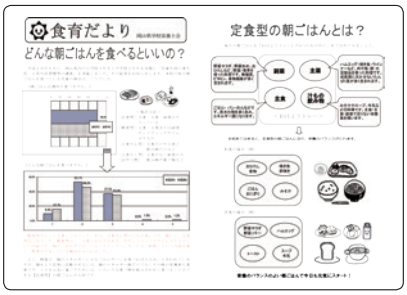
岡山県学校栄養士会　研究メンバー代表
塩﨑　恵子（岡山市立陵南小学校）

岡山県学校栄養士会では、平成3年度から5年ごとに食生活調査を実施しています。そして、平成18年度からは、児童生徒の実態を総合的に把握したいと考え、調査項目に身長・体重・体力テストを加えています。この調査を学校での食育活動に生かすためには、県下すべての学校で調査を行い、各学校での調査結果から課題を見つけられるようにすることが大切だという思いが強くありました。

まず、岡山県教育委員会や岡山市教育委員会と連携し、さらに養護教諭や体育主任の先生方と協力し、３００人以上の学校栄養士会会員がそれぞれの学校や受配校で調査を行いました。その結果、小学校5年生8,142人、中学校2年生4,146人のデータを回収することができました。

研究の一年目の平成28年度は、調査すること、結果をまとめること、結果を実施校に報告することが実施目的でした。この助成をうけて、実施校に報告するための、結果報告書とすぐに学校で活用できる食育だよりを入れたCDを作成することができました。調査結果から、朝食の欠食、生活リズムの乱れなどの課題がみえてきました。そこで、食育だよりの内容は朝食喫食率のデータを利用し、栄養のバランスの良い朝ごはんの啓発や、起床時刻や就寝時刻のデータを利用し、「早寝・早起き・朝ごはん」の大切さを呼びかけるものを作成しました。岡山県の平均と各学校のデータを比較できるようにしました。会員から、給食だよりとして配布したり、保護者懇談会での資料に活用したりという声がありました。

最後に、全国学校栄養士協議会の研究助成事業をさせていただき、私たちが行っている取組がより充 実した研 究となりました。ありがとうございました。



食育だよりの一例

学校給食における栄養管理の在り方と食に関する指導

石川県栄養教諭・学校栄養職員研究会　研究メンバー
北出 宏予　板谷 紀子　目ケ谷 光　上田 清香　不破 郁子

栄養教諭・学校栄養職員は、食に関する指導と給食管理を一体のものとして児童生徒の望ましい発達や生活習慣病の予防等、専門性を生かしたきめ細やかな対応を行うことが期待されています。私たちは所属する中能登町、志賀町、宝達志水町の中学校３校で、養護教諭と連携し、個別の推定エネルギー必要量と成長曲線・肥満度曲線を作成、（公財）日本栄養士会の支援プログラムと（公社）全国学校栄養士協議会の「新しい食育」テキストを活用し、学校給食を教材として栄養量を知らせるTT授業、食生活等実態調査、肥満・やせのハイリスク者に対する個別指導に取り組みました。この研究には、元文部科学省学校給食調査官 田中延子先生にご指導を仰ぎ、石川県小児保健学会、全国栄養教諭・学校栄養職員研究大会、日本栄養改善学会学術総会での発表を通して研究を進めました。

３校共通で実施した調査のうち「給食をほとんど残さない生徒の割合」（n:1,280）は前期（5-6月）73%が後期（11-1月）には76%になる等の結果が得られました。指導に当たった教職員から,適切な食事量を個別に知らせ給食で実際に調整していく取組は、将来の健康管理につながるとても効果的な指導である、という意見をいただきました。しかし、給食指導の時間の確保など課題もあり今後も検討を重ねていきます。

宝達中学校では肥満・やせの個別指導を実施した8名の生徒のうち6名に身体状況の改善がみられました。中学生の肥満ややせの原因は思春期特有の複雑な要因が絡み合っており、保護者の理解、本人のやる気、私たち支援者の歩調を合わせることが大切だと感じました。

適正な栄養摂取の評価には、成長曲線、肥満度曲線を用いることが必須であり、これを科学的な根拠として活用し,個に応じた適切な給食の提供と正しい知識を児童生徒に教育することがいま正に求められています。これからも研鑽を続けてまいります。

個別の摂取量は性別、年齢、体位、活動量、食べ方など様々な要因で異なっている・・・個に応じた適正量が配食できるように調整する対応は？ どうすればよいのでしょうか。

病気にならない食事　適量を学ぶお手本毎日の学校給食 ！

第58回全国栄養教諭・学校栄養職員研究大会(石川県)の報告

石川県代表者　岡田　ゆかり

平成29年8月3・4日、石川県金沢市において「全国栄養教諭・学校栄養職員研究大会」が開催されました。本県では44年ぶり2回目の開催となり、全国より延べ950人以上の先生方にご参加いただき、熱心に研究・協議が行われました。

文部科学省三谷課長からの「学校における食育の推進と栄養教諭の役割」の説明の後、「ふるさと石川の食の豊かさ」と題し、金沢市生まれの俳優・篠井英介氏による講演がありました。ご自身の食にまつわるエピソードや石川県の食・伝統をわかりやすく話され、時々金沢弁も織り込んだ心温まる講演会でした。

引き続き行われたシンポジウムでは、3月に作成・配付された冊子より、PDCAに基づき、これから学校の中で栄養教諭が中核となり食育を進める上での業務のあり方について討議が行われました。P(計画)では、全体計画・指導年間計画を作成し、実行性のあるものにすること、D(実践)では、給食時間、教科、個別的な相談指導など、どの場面においても担任、養護教諭との連携が大切であり、栄養教諭の専門性が最大限に生かせ、効果的であるかを考える必要がある。C(評価)A(改善)では、学校全体で組織的な評価を行う時、食育が位置づいているか否かは大きな意味がある。管理職を筆頭に、全教職員の理解のもと組織的な対応を行うことが重要である等、今後食育の進むべき道を教えていただき、私たちの進めてきた食育の成果を見える形で示し、次に繋げなければ、という思いを新たにしたシンポジウムでした。

展示会場では、全体テーマを「地域の食文化を継承する学校給食の実施と、それらを行かした食育の実践～いしかわの給食　つなげる食育～」と題し、学校給食で『つなぐ』食育の実践を掲示にまとめました。

石川県の栄養教諭・学校栄養職員がそれぞれ食育推進のために取り組んだものを集め、テーマ別に整理し、石川県全体としての掲示としました。このように、全体の取り組みをテーマ別に集約し展示にしたことで、改めていしかわの食育は、学校給食で地域の食文化を継承し、それらを生かしたものになっていると実感しました。

•おさかな給食　•新幹線給食
•季節を感じる給食

•おさかなさばき教室
•地場産物で調理実習

伝統をつなげるいしかわの食文化
•石川の四季の料理

第68回全国学校給食研究協議大会（鹿児島県）の報告

鹿児島県代表者　市來　さつき

平成29年11月9日(木)、10日(金)、鹿児島県のシンボル桜島を望む鹿児島市民文化ホール等において、『「生きる力」を育む食育の推進と学校給食の充実～維新に学び、食でつながり、食で育てる、健やかな子供～』をテーマに開催されました。全国から800名を超える関係者にご参加いただき、会場では、かごしまPRキャラクターぐりぶーとさくらがお出迎えしました。

【1日目　全体会】　文部科学省の三谷健康教育・食育課長から、学校給食を取り巻く課題や学校における食育の推進についての説明の後、特別講演として、シンガーソングライター辛島美登里氏による「彩りのある食と音楽」という演題で、弾き語りも交えながらご講演いただきました。すばらしい歌声もさることながら「食べ物がおいしいと思える時間は、豊かに生きることができる。食べ物が会話につながる」という言葉が心に響きました。

【食に関するパネル等展示】　全体会会場に、本県学校栄養士協議会の展示ブースを設けました。これまでの取組を本大会の分科会の主題に沿った8つのテーマのパネルにまとめ、鹿児島県の食育・学校給食の取組として紹介しました。

【2日目　分科会】　本大会では「特別支援学校における給食管理の在り方」の分科会が復活し、8つの分科会に分かれて、それぞれのテーマに基づいた実践発表、研究協議が行われました。いずれの分科会も活発な協議がなされ、指導助言の先生による講義もあり、今後の取組の参考となる有意義な分科会となりました。

【「さつま御前」弁当】　2日目の分科会では、鹿児島の郷土料理をふんだんに取り入れた特製弁当を味わっていただきました。この弁当は鹿児島県学校栄養士協議会が担当し、味のバランスや彩りなどを確認するため、会員が実際に試食するなど、料理や味、献立の検討を重ね、完成させました。

【学校栄養士懇談会】　長島会長から、「これからの栄養教諭に求められるもの」、栄養教諭期成会の在原事務局長からは「期成会の成り立ちとこれまでの歩み」についてご指導いただき、短い時間でしたが、大変充実した時間となりました。

【大会を終えて】　この大会で学んだことを今後に生かし、会員と共に、学校給食の充実と食育の推進に努めていきたいと思います。

都道府県だより

「食べて学んで生きる力を育みます」

新潟県は、日本一の米どころ。日本海の海の幸、世界有数の豪雪地帯と様々な自然・環境に恵まれています。給食は米飯給食を中心に、地域の地場産物や郷土料理をふんだんに取り入れています。私たちは新潟県の子どもたちを「食」をとおして幸せにしたい、将来の夢を叶えてほしいという願いをもち、給食を「生きた教材」として活用し、食育に取り組んでいます。また、全国学校給食甲子園には、毎年県内の全会員に参加を呼び掛け、個々の献立作成能力のレベルアップを目指しています。

新潟県学校栄養士協議会は、平成18年度に、「食べて学んで生きる力を育みます」という、食育推進宣言を行いました。同時期に始まった「マイテーマ・マイ実践」の取組は、会員一人一人が実践の振り返りをまとめることで、資質の向上を目指しています。各々が重点的に取り組んだ食育や衛生管理等について、A4判1枚程度の原稿を作成し、毎年「研修のまとめ」として発刊します。冊子として常に手元にあることで、仲間の実践を参考にしたり刺激を受けたりして、新しい取組に挑戦することもあります。また、教育委員会等の関係機関にも配付をし、指導助言をいただくとともに、栄養教諭・栄養職員の職務への理解にもつなげています。

日々の安心安全でおいしい給食と食育の取組が、未来ある子どもたちのためであることを常に心に留め、資質の向上を図りながら、家庭・地域と連携し、一歩ずつ実践を積み重ねています。

新潟県代表者　鈴木　代里子

「おいしく食べよう　和歌山ジビエ」

和歌山県には、海の恵み、山の恵み、川の恵みなど、たくさんの自然の恵みがあります。これらのすばらしい恵みを子供たちが味わうことを通して、ふるさとを大切にする子供の育成を目指しています。

イノシシやシカなどの野生動物の食肉は、昔から全国で食されてきました。また、たんぱん質や鉄分が豊富に含まれた栄養価の高い食材であることから、本県では学校給食で子供たちにもおいしく食べてもらう取り組みを進めています。

今年度は、県教育委員会より、県内全ての小・中・特別支援学校に和歌山ジビエの提供がありました。各学校では、ジビエソーセージ入のスパゲティやピラフ、シカ肉のベニスンシチューなど和歌山ジビエの給食が実施され、子供たちに大変好評でした。

私たち和歌山県学校栄養士協議会の会員は、これらを生きた教材として、ふるさとを大切にする心や自然の恵みへの感謝の心など、給食時間や授業の中で食育を展開しています。

また、会員を対象とした調理講習会・研修会においてもジビエ料理が試食され、更に県内へ広める取組を行っています。

子供たちが様々な食の体験を通し、食を大切にする心を育む上で、学校給食が果たす役割は非常に重要であると考えています。

これからも各機関と連携し、食育の推進に精一杯取り組んでまいります。

和歌山県代表者　松本　知子

関係団体と連携した研究の取組

宮崎県では県学校教育研究会と県学校栄養士会の２つの組織がほぼ同じ会員で活動しています。県内７つの地区ごとに授業研究や衛生管理研修を行い、それ以外にも地区独自の様々な取組を行っています。県全体の研修としては、毎年７月に研究協議会を実施し、今年度は福岡教育大学教授脇田哲郎先生にご講演をいただき、特別活動における食の指導について学ぶことができました。この他、会員の資質向上を図るために年間４回の自主研修会も実施しており、その中の１回は県学校給食会と連携し、「学校給食フェア」として合同開催し、その年の栄養教諭の研究内容に合った講師を招き勉強する機会としています。

また、今年度より南九州大学と連携し、栄養教諭を中核としたＰＤＣＡに沿った中学生におけるスポーツと栄養サポートの取組について先行研究を行い、次年度以降県内の会員にそのノウハウを広めていく計画となっています。その他にも今年度南九州大学監修のもと、県学校給食会と県研究会が連携し、「学校給食献立集：~食文化の伝承と地場産物の活用~」を発刊し、会員が子ども達へ食文化について指導する際に活用しています。

今後も、全ての会員が栄養教諭に求められる資質と能力を身に付け、関係団体と協力して本県の食育の課題の改善のために全力で取り組んでいきたいと思います。

宮崎県代表者　柴田　直美